
博士なロボット

氷純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

博士なロボット

【コード】

N9059V

【作者名】

氷純

【あらすじ】

残されたロボットは博士に似せたロボットを造る。

ようやく完成した。

私を造った博士が亡くなって幾星霜、残された資料と次々に発表される論文を文字通り頭がショートするほど読み込んで作り出した最新型アンドロイド。

私は胸を熱くしながらもアンドロイドを起動した。

「テスラ、気分はどう？」

私の呼びかけにテスラが反応を示す。私の博士と同じ顔、同じ体格。インプットしておいた性格あらゆるものをテストしなければ。

ああ、もうすぐ会える。この日をどれだけ待ったことか。

「問題ないわ。ネスト」

博士の声だ。記録にある通りの凛々しい声。なんて懐かしいのか。

「さあ、私達はずっと一緒よ」

とある不可思議なロボットが俺の研究所に運び込まれた。

何でも製作者が分からない実に精巧な代物だそうで、分解するよ
うに上からの命令がきた。

「違法ロボットですね」

助手が嫌な顔をする。それも致し方ない、俺だってここまでおぞ
ましい物は初めて見た。

「全く、分解する身にもなれってんですよ。こんな精巧に人に似せ
やがって」

助手が見えない制作者に毒吐く。俺としても制作者の妄執が見て
取れる違法ロボットは気持ち悪くなる。

聞いたところによると、普通のロボットがもう一体あったそうだ
が――

「これ通信機が入ってますね」

助手が違法ロボットの分解に取りかかっていた。嫌なことを早く終わらせたいのだろう。

「これ何でしょうね？」

助手が投げて寄越した通信機を受け取る。

「もう一体のロボットにもあつたらしい」

先に分解されていた普通のロボットに関する資料を読むと後付けの通信機について記述があつた。

「片方が壊れるとその信号を受けとつたもう片方もデータがすつ飛ぶように細工されていたそうだ」

「残された方が寂しくないように、ですか？」

助手がうんざりしたように嘆息した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9059v/>

博士なロボット

2011年10月9日10時27分発行